

Jaswant Singh, JINNAH: India-Partition-Independence

著者	深町 宏樹
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジア経済
巻	52
号	5
ページ	51-57
発行年	2011-05
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00007051

Jaswant Singh,

JINNAH: India-Partition-Independence.

New Delhi: Rupa & Co., 2009, xvi+669 pp.

ふか まち ひろ き
深 町 宏 樹

はじめに

本書は「パキスタン建国の父」ジンナーの評伝である。著者はインド人政治家、しかもヒンドゥー主義者である。インド人政治家によって「パキスタン建国の父」ジンナーに関する本が執筆されたのは過去に例がない。

本稿の読者はまず山口博一氏による「書評 B.R.Nanda, *Road to Pakistan: The Life and Times of Mohammad Ali Jinnah*」(『アジア経済』第52巻第2号 [2011年2月号])をお読みいただければと思う。B・R・ナンダの書と本書とは類似のテーマを扱っていて重なるところが多いが、両者の立場・思想などの相違により、異なった側面にも目を向けることができよう。

本書は2009年8月にニューデリーで出版された。上記のB・R・ナンダがインドの歴史家であるのに対し、ジャスワント・シンはヒンドゥー主義政党「インド民衆党」^(注1)の創立党員で中核的指導者の一人である。

本書の出版を知った時、評者はインド・パキスタン関係の変遷を痛感した。著者は、本書の執筆が可能になったのは1999年2月にヴァジパイー首相に随伴してパキスタンのラホール市を訪れてからのことだったという(巻頭謝辞p. xiii)。それは1998年の印パ両国の核実験を受けて両国間で首脳会談を行うための訪問であった。ラホールはその59年前にインドのムスリムたちの建国要求が宣言された正にその場所である。

しかしながら著者は第11章「回想」で、インド・パキスタンの血まみれの分離独立についていう。「我々の“過去”は現実には決して“過去”にはなっ

ていない。(中略)我々は(イギリス領インドの)分割を迫体験する。(中略)由々しき過ちを繰り返さないために」(pp.524-525)。

ここで、本書を紹介する機会を与えられたことに深く感謝する。

I ジンナー政治年表

- 1906年 全インド・ムスリム連盟 (All India Muslim League)がダッカで創立。ジンナー、これを批判。
- 1913年 インド国民会議派 (Indian National Congress) 党員であるジンナー、連盟にも入党。
- 1916年 ジンナー、連盟議長に就任。
- 1920年 ガンディー、イギリスに対して不服従運動を開始。ジンナー、この運動に反対。
- 1920年10月 ジンナー、会議派から脱退。
- 1929年3月28日 ジンナー、インド連邦制などを要求する「14項目」を発表。
- 1930年12月30日 ムハマド・イクバル、連盟アラハバード支部会議演説でインド北西部でのムスリム国家建設の必要性を提案。
- 1931年6月 ジンナー、インドの政治に失望してイギリスに移住。
- 1931年10～11月 ジンナー、第2回ロンドン円卓会議に出席。
- 1934年1月 ジンナー、イギリスから帰国し、3月に連盟総裁に再び選任される。
- 1936年3月 ジンナー、インドのムスリムたちに不服従運動の中止を訴える。
- 1936～37年 イクバルがパキスタン国家建設構想を抱いてジンナーに接近。
- 1937年1～2月 第1回全11州議会選挙で会議派が圧勝。
- 1937年 ネルー、会議派議長に就任。以後、会議派とジンナーの関係が悪化 [山口 2011]。
- 1937年10月15日 連盟のラクナウ大会でジンナーはムスリムたちの会議派への対抗心を鼓舞。
- 1937年10月17日 連盟ラクナウ大会は「連盟の目標はインドにおける連邦形式での国家 (States) の樹立である」[Saeed 1981, 69] との決議案を採択。
- 1940年2月 ジンナー、連盟はラホールでの大会でインドの分割を要求すると正式にリンリスゴウ

(Lord Linlithgow) 総督に通告。
 1940年 3月22～24日 連盟のラホール大会, インド分割によるムスリム国家建設を要求する決議案を採択 (23日)。
 1940年 8月 8日 チャーチル英首相がリンリスゴウ総督の名で「8月提案」(August Offer)を提示。
 1942年 8月 9日 会議派,「インドを出て行け運動」(Quit India Movement)を開始。指導者全員,逮捕。この頃, ジンナーの健康が衰え始める。
 1944年 9月 4日 18回に及ぶガンディー・ジンナー会談, 決裂。
 1946年 2月 11州議会選挙で連盟が圧勝。
 1946年 3月 イギリス内閣使節団 (Cabinet Mission), 訪印。
 1946年8月16日 連盟による「直接行動の日」(Direct Action Day)。
 1947年 6月 3日 「マウントバッテン計画」(Mountbatten Plan=3 June Plan) 発表。
 1947年 8月14日 (パキスタンの独立に先立って) マウントバッテン総督, カラチでパキスタン制憲議会を開会。ジンナーがパキスタン総督 (Governor General) に就任。
 1947年 8月14～15日 インドとパキスタンの分離独立 (8月14日24時=15日0時丁度)。
 1948年 1月30日 ガンディー, 暗殺される (79歳)。
 1948年 9月11日 ジンナー, 病没 (71歳)。

この年表は政治家ジンナーの時期区分を考慮して作成したものである。この年表の作成に当たっては, 本書のほかに, Saeed (1981), Dani (1979), Burki (2003), Hasan (1966), 山口 (2011), および評者の既成年表を用いている。

II 本書の内容

1. 本書の構成など

本書の本文は11章525ページからなる。本文のほかに扉, 謝辞など16ページ, 各章別に記載された「付録」60ページ, 巻末注68ページ, 索引15ページなど計669ページのほか写真16ページ (27葉), 地図2ページ (2葉) などで構成された大著である。本文の概要はジンナーとの関係に焦点を当てつつ以下の「2. 本論」で後述する。

本書から政治家としての著者の偏向かと思えるところが垣間見えることは否定できないが, 本書は南アジア政治史の研究にも有用な解説を豊富に含んでおり, 各章ごとの「付録」に加えて本文中や巻末注にも随所に資料が載録されている。

本書の最も基本的な軸となるのは, 1947年のインド・パキスタン分割 (partition. 以下, 「分割」ないし「印パ分離」) が何故に断行されたのかという著者自身の積年の疑問である。著者はそれを問いつける中で政治家ジンナーを描き出し, また, 印パ分離に関わる様々な事象を解き明かそうと試みる。

著者はBJP連立政権期 (1996年, 1998～99年, 1999～2004年) にインドの外務大臣, 国防大臣, 大蔵大臣などを務めた人物である。そのため本書は「パキスタンおよびジンナーへの敵意に満ちている」と予想するのが普通であろう。しかしそういう記述は主題によりけりで, 文章の運びはおおむね冷静で, 暗い予測はすぐに消えていく。

巻頭の謝辞に協力者としてまずパキスタン公文書館 (National Archives of Pakistan) のジンナー関係文書プロジェクト編集長の名が出てくる。また数々のインド人のほかに, ジンナー創刊の日報 *Dawn* の経営者ハミード・ハールーン (Hameed Haroon) などのパキスタン人も協力者である。そして著者はジンナーの政治人生の旅になぞらえつつ彼の評伝を書き進める。

以下, 外国語の音写については拙稿ではいわゆる「正確な」表記にはこだわらない。片仮名で「正確な」音写をしようとすれば音写がかえって不正確になることが少なくないからでもある。また, インド国民会議派 (国民会議派= कांग्रेस党= कांग्रेस: Indian National Congress), 全インド・ムスリム連盟 (全インド・イスラーム教徒連盟= 全インド・回教徒連盟: All India Muslim League) はそれぞれ「会議派」, 「連盟」と略記し, 「インド・パキスタン」は「印パ」, 「イスラーム教徒」は「ムスリム」と表記する。

2. 本論

1896年にイギリスから帰国したジンナーは, 会議派のG・K・ゴーカレー (Gokhale) およびD・ナオロージー (Naoroji) 会議派議長に魅せられて会議派に入党し, 政治の道を歩み始めた。翌1897年には

イスラーム協会 (Anjuman-i-Islam) にも加わり、会議派におけるムスリムたちの役割などについても政治活動を開始した。

1905年、カーゾン (Curzon) 総督は反英民族運動の拠点だったベンガル地方に「ベンガル分割令」を発令した。その重点は東ベンガル地方におけるムスリム自治州設置であった。イギリス流分割支配の一例である。ところが、これに反対の会議派は反英運動を激化させた。他方、この法令を歓迎するムスリム勢力は翌1906年、連盟をダッカで創立した。

創立当時の連盟は大地主など権力者の党にすぎなかったため、ジンナーは連盟創立を批判した。そのジンナーはインド・ナショナリストとしての政治路線を歩み始めており、「ヒンドゥー・ムスリム結束の使節」(“ambassador of Hindu-Muslim unity”)といわれるようになっていった。その彼が何故にインド分割を目指して動くようになったのだろうか、と著者は問い、インド分割の原点に迫る姿勢をみせる (pp.6-9)。

第1章「インドとイスラーム」および第2章「ジェナブハーイーからジンナーへ——旅路——」は本書の導入部分ともいえる。第1章の「自ら (ムスリムたち) がインドを支配していた過去の栄光への郷愁は、まずイギリス領インドにおいて政治的に特殊な地位を得ること、1940年代になるとヒンドゥーたちに対する同格意識へ、そして自らの国土パキスタンの獲得へとムスリムたちをせき立てた」という趣旨の記述 (p.35) は、本書の根幹にある政治思想をうかがわせる。

第3章「騒乱の1920年代」。以前からみられたヒンドゥーとムスリムの衝突は1920年代に入って、イギリス植民地体制下での両者の権力争奪戦、ムスリムの後進性・被差別意識の悪化などによって激化していった (pp.114-139)。ムスリムたちは元来、10～11世紀に北部インドへ侵入してきた勢力であった。だが、下層カーストやカースト外の人々^(注2)は人間の平等性をとなえるイスラームに引かれ、続々とイスラームに改宗していった。

第4章「鮮明になる焦点——せばまる選択肢——」は1930～32年に3度実施されたロンドン円卓会議などについての叙述である。同会議では特にインド人のスワラージ (swaraj. 自治権) とヒンドゥー・ムスリム両者の関係などで激しい議論の応酬がみられた。

第5章「短かった10年間——長かった最後の駆引き——」は本書の要になる章である。1937年の全11州 (province) での選挙における会議派の圧勝はジンナーに決定的な影響を及ぼした。連盟は、北西辺境、パンジャブなどムスリムが多数を占める州でも致命的な打撃を受けた。それでも実はジンナーは1937年選挙後もまだ会議派との結束を口にしていた (p.233)。しかし、会議派のネルーは、「インドにある党は“イギリス政府”と“会議派”だけだ」と豪語した (pp.246-247)。また、各地に登場した会議派政権、特に北部の「連合州」(United Province. 現在の“ウッタル・プラデーシュ [州]” [UP] の母体) 会議派政権の連盟無視 (p.257) は連盟を会議派との連携から離反させ、「ムスリム民族主義」を増幅させた。1937年選挙の経験に学んだジンナーは理想主義者から現実主義者へと転じていった (pp.220-221)。1937年は南アジア政治史において正に「分水嶺」(p.223) になった。1930年末のこと、ムハマド・イクバル (Muhammad Iqbal)^(注3) が連盟アラハバード支部会議演説でインド亜大陸におけるムスリム国家の必要性を訴えた。1933年には、チョウドリー・レフマット・アリー (Choudhry Rahmat Ali) が「今だからこそ」(“Now or Never”) というパンフレットでムスリム国家「パキスタン」の建国を訴えた^(注4)。1936年から37年には人生終焉期のイクバルがムスリム国家建設構想を抱いてジンナーに接近し、強い影響を及ぼした。なお、著者はなぜかレフマットとイクバルのことはわずかに触れているだけである (p.222)。

1937年、ネルーが会議派議長に就任して連盟無視の姿勢をとり、中央集権政策を強調すると会議派とジンナーとの関係は従来以上に悪化していった。ムスリムたち一般は「ヒンドゥー支配」(Hindu Raj) の始まりを感じ取っていた (p.234)。1937年10月、連盟のラクナウ大会でジンナーは会議派がコミューナル^(注5) 戦闘を引き起こすことになる「ヒンドゥー政策」を追い求めていると批判した (p.240)。そして連盟はこの大会で連盟の目標は、インドにおける国家 (States) の連邦形式での樹立であるとの決議案を採択した [Saeed 1981, 69]。

第6章「帝国の落日——破産する銀行への先日付小切手——」においては、インド植民地を独立させるにあたってイギリス帝国が自らの傷をできるだけ

浅く留めるためにいかなる手順を踏んだのか、他方、会議派と連盟（特にガンディーとジンナー）はどのように動いたのかについての検証が行われる。1940年8月8日、チャーチル（Churchill）英首相によってリンリスゴウ（Linthgow）総督の名で「8月提案」（August Offer）が提示された。これには「少数者たち（minorities）へのイギリスの責務」が書き記されていた。これは連盟にとってはインド分割の事前発表のようなものであった（pp.287-288）。1942年4月、「8月提案」に沿った形で「クリップス提案」（Cripps Proposals）が打出されたが、失敗に終わった。同提案は会議派の即時独立要求にも連盟のパキスタン建国確約要求にも十分に応じられるものではなかったのである。

時は第2次世界大戦の最中。イギリス政府と軍は忙殺されていた。1942年8月9日、会議派による「インドを出て行け運動」（Quit India Movement）が開始された。だが、会議派指導者全員が逮捕された。この頃ジンナーの健康は衰え始めていた。にもかかわらずジンナーは会議派指導陣の逮捕によって得た活動の時間と余地を活用した（p.301）。

1944年9月、ジンナーと釈放後のガンディーとの間で会談が行われた（pp.307-312）。18回に及ぶ会談は、すべてボンベイのジンナー宅で行われた。目的は基本的にはガンディーがインドの2カ国への分割を阻止することであったが、ジンナーは全く応じず、会談は決裂した（pp.307-327）。この会談は、その形式にしても、ガンディーをいたく傷つけるものであったろう。しかし、それでも彼はジンナーのひたむきさに最高の敬意を払ったのである（p.326）。

第7章「継承権の争い——分かれ道——」で扱われるウェーヴェル（Wavell）総督期（1943年10月～47年7月）は乱気流の吹き荒れる時期であった。インド国内ではベンガル飢饉（1943～44年）などで社会は荒れ、会議派と連盟の対立は解決のめども立っていなかった。イギリス本国の戦争優先策のため、戦時期の巨大植民地インドへの軍や行政権の譲渡の優先順位は最下位に置かれた（p.332-334）。

ジンナーにとってこの時期に起こった重要なこととして1945年12月の中央議会選挙と翌46年2月の11州議会選挙がある。前者では、ムスリムたちに保留（配分）された議席で連盟が完勝し、後者でも圧勝した。とはいえ、連盟がムスリム保留議席の90パー

セントを獲得したところでも議会で絶対過半数は獲得できなかった（p.354）。少数派としてのムスリム勢力の悲劇であった。

1946年3月、イギリス政府は「内閣使節団」（Cabinet Mission）をインドに送り込んだ。インドの事態は改善の方向をみせたが、結局は元の本阿弥になってしまい、連盟が全国における「直接行動」（Direct Action）を決定した（p.386）。同年8月15日真夜中～18日のカルカッタでの「直接行動」は、おぞましい大規模な殺戮劇を引き起こし（pp.383-390）、最終的にはインド分割を早めることになった（p.390）。

第8章「妨害された交渉？」。カルカッタのコミューナル騒乱が衰えもせず各地に波及していく中で（p.398）ガンディーとジンナーが会談を行った。ネルーがガンディーを引き継ぐことになり、ジンナーは（1946年10月5日に）ネルーに会う条件として、「連盟はインドのムスリムたちの圧倒的多数を代表している」という主張を会議派側に認めさせたのである（p.398）。このあと、ネルーとジンナーの会談は決裂し、翌1947年3月、イギリス海軍元帥であった「ビルマの伯爵」マウントバッテン（Mountbatten）がインド総督として赴任してきた。ネルーはそれから1カ月も経たないうちに心底よりインド分割賛成に転じていた（p.419）。同年6月3日までには連盟、会議派など皆がインド細断に賛成していた（p.422）。ただ著者は、「会議派のインド分割賛成は1940年の連盟による“パキスタン決議案”採択直後からのいきさつの終着点だった」という趣旨のことを書いている（p.450）。

第9章「マウントバッテン総督期——イギリス統治の終焉——」。会議派は実はパキスタン容認の決議を1934年、42年、45年、47年3月に直接的あるいは間接的に採択していた（p.44）。（連盟の）2民族論とインドの“生体解剖”に反対していたガンディーもすでに1940年4月、「8000万のムスリムたち（中略）誰だろうと分離を要求してもいいのだ」^{（注6）}と書いている（p.451）。

1947年6月3日、インド分割のための「マウントバッテン計画」（Mounbatten Plan）が発表され、最終的には8月15日0時（8月14日24時）、その瞬間にインドからパキスタンが分離して、すなわちインドが分割されて、インドとパキスタンが別々の国

として同時に独立した。著者はこの印パ分離独立に関するマウントバッテン総督の感性の鈍さなどに憤りを隠さない (pp.465-466)。

著者はまた、インドに無知なイギリス人弁護士ラドクリフ (C. J. Radcliffe) の印パ国境線確定責任者への任命、そして彼のずさんな仕事振りにも極めて批判的である (pp.439-448)。

第10章「パキスタン 誕生と独立——偉大なる指導者の最後の旅——」。1947年8月7日、ジンナーはヒンドゥーとムスリムの双方に過去を忘れるように訴え、インドの成功と繁栄を祈ってインドを去り、自分の誕生の地カラチに着いた (p.467)。著者はジンナー初代パキスタン総督をここでも「偉大なる指導者」(Quaid-e-Azam)^(注7)とパキスタン人一般と同じく尊称で呼んでいる。ジンナーは自らが作り上げた国家が独立した翌年に死去した。「パキスタン国民」としては1年1カ月足らずの命であった。結核を患ってはいても健常人のごとく振る舞い、自らの病を誰にも悟られることなく、建国の宿願を果たした人物の死であった。ジンナー個人の医者I・バクシュ博士は、ジンナーを保養地からカラチに連れ帰った時の記録を書き残している。著者はバクシュ博士の記録全文を敬意を込めて載録している (pp.470-474)。生誕の地カラチに戻ったジンナーは、その日のうちに死んだ。インドでは国喪に服す指示が政府から出され、半旗が掲げられた (pp.474-475)。

ジンナー死去の7カ月半ほど前のこと、ガンディーがヒンドゥー主義強硬派の人物に暗殺された。インドの自由のための戦いにおける2人のような偉大な人物が再び現れるのは容易なことではないだろう (p.474)。

第11章「回想」はジンナーの紆余曲折した「旅路」の重要な点がまとめて語られている箇所であり、著者が自らの胸中を吐露した箇所でもある。著者はこの最後の章で「1947年にインドが何故に分割されたのか私にはいまだにわからない」(p.483)という。また著者は、「パキスタンの誕生でジンナーの理論が確定的なものだと立証されたのだろうか」(p.484)と問う。建国後のパキスタン国内ではムスリム同士の種々の争いが起こり、ついに1971年には東パキスタン州が(インドの軍事力に支援されて)バングラデシュとして独立した。著者は畳み掛けて問う。「バングラデシュの出現でこの理論(2民族論)は否定

されることになったのだろうか」(p.484)と。

こういった疑問への答えは多種多様であるだろう。著者自身は政治家としてのジンナーを本書の各所で賞賛するが、印パ分割ないしパキスタン建国のことになると全く妥協しない。著者はジンナーが「別個の民族としてのムスリム」と(2民族論を)提議したのは基本的過ちであったという (p.498)。

著者はまたすでに第6章で「ジンナーはパキスタンの性格を決して説明しようとはしなかった」と指摘している (p.276)。それは、ジンナーが、パキスタン建国が先で、パキスタンをどういう国にするかはそのあとのことだと考えていたためであっただろう。分割以前の全インドのほぼ全ムスリム社会の政治的指導者であった (p.484)、と著者も認めるジンナーの構想によるパキスタン国は、まぎれもなくムスリムのものではあるが神政国家ではないと著者は断言する (p.479)。

ジンナーを宗教との関係からみた場合、インド人ヒンドゥーたち、特にBJP政治家たちにとっては、ムスリムたちの国パキスタンの建国者ジンナーは“secularist”(非宗教主義者、世俗主義者)とは映らない。この点で、一時期ジンナーの秘書であったM・R・A・ベークがジンナーの思考にイスラームはほとんど入ってこなかったと書いている (p.485)のは興味深い。また、著者によると、ジンナーの敵対者はヒンドゥーたちでもヒンドゥー教でもなく、会議派であり、ジンナーの戦いは連盟と会議派の間の全く政治的なものであり、宗教は二義的なものであった (pp.485-486)。かくして印パ分割と相成り、「平和は全て失われた」(p.496)と著者は嘆く。

ムスリム民族主義に基づいて建国されたパキスタンはイスラームのアイデンティティー (Islamic identity) を主張し続けるしかなく、そのためイスラーム共和国 (Islamic Republic) というアイデンティティーを選択した (p.499)。そして今、パキスタンは最終的に、恐らく必然的に“聖戦国家”(“jihadist state”)になるしかなく、地球規模テロリズムの中心地点になってしまったと著者は力説する (p.499)。また、パキスタンはイスラーム国家になり、国の法体系の基本的原理としてイスラーム法 (shariah) を採択したという (pp.520-521)^(注8)。さらに、パキスタンはテロリズムを国策の一手段として選択し、またターリバーン化は今やパキスタンの五臓六腑を

むしばんでいるが、このようなことはジンナーの夢の中にはなかったと著者はいう (p.521)。そして、欧米自らの利益のために戦略的前哨基地として選り抜かれたパキスタンが、印パ分離から60年以上を経て欧米の安全保障にとって最悪の問題を呈する国であるのは、極度に皮肉なことであると著者は憂えるのである (p.521)。

パキスタンとイスラームとの関係についての著者のこのような記述を読むと、著者はやはりヒンドゥー主義者でインド政府の外交官や国防大臣を務めた人物だと評者は思う。また、著者本人が「記述されたことはすべて主観的である」(p.10)と認めており、著者の上記論述には感情的な誇張がみえてくる。たしかにパキスタンには「イスラーム法廷」(Shariat Court)がある。それは1979年2月に陸軍参謀長ジアー・ウル・ハク (Zia-ul Haq) 大統領が大統領命令による憲法改正によって設置した。しかし、現実には「イスラーム法廷」は政治の基本的な面ではほとんど機能してこなかった (もっとも今後どうなるかはまだ明言できない)。また、パキスタンがテロの発進基地のひとつになりつつある情勢はみえてくるが、「パキスタンがテロを国策の一手段として選択した」(p.521)というのは「誇張」というより情勢把握の誤りというべきではないかと考えられる。

著者ジャスワント・シンは本書執筆後BJPを除名された^(注9)。その理由は本書中のジンナー賞賛などにあるという。しかし著者はパキスタンのインド本体からの分離を全く容認してはいない。今この時代に彼が本書を世に問うたのは、イスラーム主義の脅威がパキスタンに伝播し、インドをも脅かしていることがひとつの理由であろう。インド国内政治の面からすると、パキスタンのインド本体からの分離を容認した会議派を著者は許すことなく、各所で会議派を非難する。

ジンナーの評価はパキスタン国内でも定まっていない。「国父」ジンナーの批判は、印パ分離独立時にインドから移住してきた人々 (muhajireen. ムハージルたち) や「パンジャービー民族」(Punjabi ethnic group)の間では事実上タブー視されている。だが、ジンナーの評価加減が今後の情勢によって(地域により、「民族」により)上下することは避けられない。ジャスワント・シンの本書の評価も人によ

り、所により、時代により様々であることは避けられまい。

(注1) Bharatiya Janata Party: BJP. 「インド人民党」ともいう。

(注2) 「アチュート」(achut) などと呼ばれ、人間扱いされないという。

(注3) カシミーリー民族(“民族”はここでは“ethnic group”の訳語)系の詩人・哲学者。

(注4) 「パキスタン」(PAKISTAN)という国名の着想者はC・レフマット・アリーである。彼はかつてのイクバルと同じくイギリスのケンブリッジ大学に学んでいた。

(注5) 「集団間の」の意味だが、インドでは特にヒンドゥー・ムスリム間のことをいう。

(注6) 1941年インド国勢調査によると1941年インド総人口は約3200万であった。Census of India - India at a Glance: Variation in Population since 1901 [censusindia.gov.in/Census_Data_2001/India_at_glance/...](http://censusindia.gov.in/Census_Data_2001/India_at_glance/)

(注7) Quaid-i-Azam に同じ。

(注8) この箇所には多少とも事実誤認の色彩がある。2009年2月にイスラーム法が施行されるようになったのは北西辺境州(North West Frontier Province)のうちターリバーン勢力が実効支配していた(いる)スワート地区だけである。ただし、パキスタン政府関係者などが今後のパキスタンの行方に不安を抱えていることは否定できない。なお、北西辺境州は2010年4月に正式に「ハイバル・パフトゥーンフワー(Khyber Pakhtunkhwa)州」と改名された。

(注9) 2010年6月、ジャスワント・シンは復党を承認された。

文献リスト

<日本語文献>

山口博一 2011. 「書評 B. R. Nanda, *Road to Pakistan: The Life and Times of Mohammad Ali Jinnah*」
『アジア経済』第52巻第2号 (2月)。

<英語文献>

Burki, Shahid Javed 2003. *Historical Dictionary of*

Pakistan. New Delhi: Vision Books Pvt. Ltd.
Dani, Ahmad Hasan ed. 1979. *World Scholars on
Quaid-i-Azam Mohammad Ali Jinnah*. Islamabad:
Quad-i-Azam University.
Hasan, K. Sarvar ed. 1966. *The Transfer of Power*.

Karachi: Pakistan Institute of International Affairs.
Saeed, Yousuf ed. 1981. *QUAID-I-AZAM JINNAH A
Chronology*. Karachi: Quad-i-Azam Academy.

(桜美林大学非常勤講師)